ＩＴ社会と言葉　―コミュニケーション手段の置換を巡って―

一般科目（国語）　　田崎弘章

１．はじめに

「ＩＴ社会」という日本語が使用されるようになって久しい。この言葉は、誕生した当初、「ＩＴ」技術が発達した「社会」という意味に用いられていたように思う。しかし、今では「インターネット（電子メールを含む）」世界の中に出現した「仮想社会」の意味で用いられることが多くなってきている。この「社会」は、コンピュータ・ネットワークの中に存在する「仮想」のものでありながら、情報の交換や金銭の授受を伴う商取引まで、「現実」社会に深く関与している。それを思えば、「ＩＴ社会」という言葉自体も、もはや取り立てて言挙げするような特別な意味を失いつつあるのかもしれない。

人間が獲得した技術は、往々にして「利便性」の陰で副次的な「負の作用」を生じさせることがある。「ＩＴ社会」については、新しい技術をベースにしているため、まだまだ「負の作用」について、表面化していない部分も大きいことであろう。しかし、既に明らかになりつつある「負の作用」は、利便性の大きさに比例して複雑で多岐にわたっている。

我々は、その「負の作用」について、主に青少年の健全育成という教育の側面から考察し、「ＩＴ社会」形成以前のコミュニケーション・モデル（手紙・教育・出版・マスコミなど）をベースに、将来のコミュニケーション教育のあり方について検討してみたい。

２．コミュニケーション手段の置換という現象

「ＩＴ社会」の形成に伴って、まず生じたことは、従来の社会に存在したコミュニケーション手段が、下表のとおり電子媒体によるものに置換されていくという現象であった。

新しい技術は、常に従来の技術に置換する。「洗濯板と洗い桶」は「洗濯機」に、「竈とお釜」は「電気（ガス）炊飯器」に、というように置換された。では、ＩＴの技術は、何を置換したのか。

コミュニケーション	置　換		現　状
	従来社会使用媒体	ＩＴ社会使用媒体	
①　遠隔の人との個人的会話	１家１台の固定電話	１人１台の携帯電話	並存しているが、携帯電話が主流となりつつある。
②　遠隔の人への個人的音信	手紙	電子メール	並存しているが、手紙は限定的目的に特化。メールが主流となっている。
③　公的社会的な情報の入手・読書	新聞・書籍ラジオ・テレビ	ニュースサイト・個人サイト・掲示板・ブログ等	並存している。しかし、若年層の活字離れは深刻。ネット利用の場合、入手する情報が個人の好みにより細分化・特殊化する傾向がある。
④　教育・学習	学校・図書館	検索エンジン・データベース	並存している。既に、学校教育や図書館自体が検索エンジンやデータベースに依存しており、誰が入手する情報にも差がなくなっている。

この表は、主に青少年が関わるコミュニケーションについてまとめたものだが、ＩＴ技術の浸透とともに、大きな変化が見られる。この置換の実態について、①～④のそれぞれを考察することで、「ＩＴ社会」は何を変化させたのかを以下に明らかにしたい。

２－①　遠隔の人との個人的会話

◎固定電話

電話は、家族の共有物であり、電話を掛ける時も、先方の家族の誰が電話の呼び出しに応じるか分からなかったため、話し方に定式がある。

例えば、会話を切り出す際には「もしもし、こちら○○と申しますが、□□さんはいらっしゃいますでしょうか？」を基本とする挨拶が重要になる。

また、電話を受ける際も、（個人情報保護の観点から、自ら名乗る言い方は憚られるようになったが）「もしもし、こちら△△と申します。どちら様でしょうか？」という形式がある。電話を掛けてくる人は家族を来訪する客人であり、電話への応対には、もてなしの気持ちが必要だと考えられているのであろう。

固定電話には、家族の一員から家族の一員へという側面があったため、大した用もないのに電話することは遠慮される。会話の内容にしても、他の家族に聞かれると困るような話はできない

以上のことを教育的な観点から見る時、コミュニケーションにおける社会性、マナー、エチケットを育てる余地を残したコミュニケーション媒体であるといえるだろう。

◎携帯電話

電話は、個人のものであり、電話を掛ける時にも、受ける時にも、話し方の定式は必要がなくなった。電話を掛ける側は電話番号を登録しておき、名前を選んでダイヤルするだけである。受ける側も番号を登録しているから、誰からの電話なのか着信前に分かる。そのため、いきなり「今どうしてる？」「今、いい？」「元気？」「何用？」のような軽い挨拶から、いきなり「今から遊びに来ない？」のような用件に入ることができる。また、出たくない相手からの電話なら、最初から着信拒絶もできる。

誰にも邪魔されず、どこからでも手軽に電話ができる携帯電話は、コミュニケーションを開始するまでの形式的な垣根を取り払ってしまった。

日本では、一人前の社会人としての判断力を持たない青少年にも携帯電話を持たせるが、そのことによって、一部に深刻な状況が生じていることは周知のとおりである。（現在、青少年の間で大きな問題になっている援助交際、麻薬汚染、性交渉の低年齢化等々は、携帯電話の普及との関連性が早くから指摘されている。）

携帯電話は、子供が、何時、何処で、誰と、どのような会話を交わしているのか分からない社会を出現させた。このことによって、コミュニケーションの前提として求められる社会性、マナーのようなものも、衰退させているように思われてならない。

２－②　遠隔の人への個人的音信

◎手紙

長い伝統を持つ書き言葉による通信手段である。頭語・時候の挨拶・安否の挨拶から始まる「前文」、用件を書く「主文」、用件の要約・結びの挨拶・結語を記す「末文」、日付・差出人署名・宛名・（副文）を添える「後付」という形式が定まっており、省略する場合にも、その作法（前略～草々など）がある。

手紙は、様々な面が長い歳月をかけて洗練されており、便箋・封筒・筆記用具など、何を選ぶかによっても親しみやフォーマルさを演出できるようになっている。その上、書き方の様式がしっかりしているため、それを守っている限り、マナーから逸脱する恐れがない。

また、紙に書かれた言葉は、破棄しない限り残り、手紙をやり取りした者以外の第三者にも読まれるという宿命がある。それを認識した上で、正式な様式を以て紙に書きしたためるという行為は、緊張感を伴うため、書き手は、おのずから言葉を選び、表現を整え、読むに堪える

文章を書こうと努力するようになる。

◎メール

キーボード入力による電子的な文字は、添加・削除・修正が容易であり、習熟すれば肉筆による筆記よりもはるかに速い速度で書くことができるため、「書き言葉」ではなく、「話し言葉」に近いものであるという錯覚を招く。この錯覚を利用したものに、インターネット上のチャットや、ＢＢＳ掲示板などがある。

しかし、この錯覚は、非常に危険な面を持っている。本質は「書き言葉」であるメールは、直接対面の会話に比べて情報量が乏しい。それに配慮せずに、自分の思い込みだけで交信していると、思わぬところから齟齬が生じてフレーミングが起こったりする。過去には、所謂「メル友」を親友や恋人と錯覚したばかりに、騙されて事件に巻き込まれた例が今までに何件もニュース報道されている。

手紙の形式は、直接対面の会話に比べて非常に情報量が少なく、一旦送信したら修正が効かない「書き言葉」を用いて、いかに効率よくメッセージを伝えるか、ということに苦心した末に、長い伝統の中で形作られてきたものである。一見、煩く見える形式だが、手紙の読み手に対する思いやりと配慮に満ちており、書き手が信頼に足る人間であることを理解してもらえるように工夫してある。

それに比べて歴史が浅いメールは、まだ、正式な書式というものが確立されておらず、取り敢えずは、「手紙」の書式を模倣することで、フォーマルなものであるという演出をするにとどまっている。だが、まだ「結婚式の案内状」を出して信頼してもらえるフォーマルさのレベルには至っていない。

【付記】

宣伝・広告を目的としたダイレクト・メールも、現在では、電子メールに置換されている。しかし、電子メールで届く宣伝・広告は、その大半が「スパム・メール」として一括削除され、全く読まれていないのが現状では無いだろうか。

では、なぜスパム・メールは読まれないのか。その理由を良く考えると、「書き言葉」の宿命である「情報量の少なさ」に原因があることが分かる。誰が、何の目的で送ってきたのか分からないメールは、それだけで気味が悪い。

それを思うと、メールによる円滑なコミュニケーションを図るためには、「ＩＴ社会」の外部、「現実社会」での信頼関係の構築が重要だということになる。

２－③　公的社会的な情報の入手・読書

◎新聞・書籍・ラジオ・テレビ

所謂マスメディアといわれるものであるが、これらは公共の情報を扱うということから、様々な法律に規制されている上に、報道や放送の倫理が形成されており、有害な情報を流すことは許されない。勿論、表現の自由は憲法に保障されているが、それはあくまでも公共の福祉に反しないことが前提となっている。

◎ニュースサイト・個人サイト・掲示板・プログ等

マスコミ大手の新聞社や放送局などが運営するニュースサイトは、新聞やテレビの内容と大差ないが、政治的・思想的な結社や宗教団体、特殊な志向を持った集団や個人が運営するサイトからは、かなり偏った情報が流されている。ネット社会は、余程のことがない限り、表現の自由が認められており、全ては閲覧者の良識ある判断に任せるという考え方で成立している。しかし、行き過ぎた性や暴力の表現が、青少年に思いもよらない刺激を与え、犯罪を引き起こ

していた事例もあるし、「自殺系」と呼ばれるサイトで知り合った人が集団自殺を遂げる事例も跡を絶たない。インターネットでは、入手する情報が、個人の好みにより細分化・特殊化する傾向がある。

「ＩＴ社会」は、それこそお茶の間に置いてあるパソコン端末から入って、途方もない裏社会にまで迷い込むことのできる世界である。現実社会では、絶対にそのような悪所に足踏みすることはないつもりでも、インターネットでは、マウス・クリックの繰り返しと、キーボード操作によって、自殺願望者や麻薬の売人のすぐ傍にまで行けてしまう。青少年の健全育成という観点に立てば、未成年に何の保護プロテクトも施されていない端末を使い放題にすることは問題であろう。

また、刺激に満ちたインターネットの世界に嵌まり込むと、「読書」という行為は、まどろっこしいものに感じられるようだ。自分の中にしっかりとした社会性を育てるためには、良書に親しむことは重要である。しかし、インターネットが普及した社会において、いかにして読書を奨励すればよいのか、難しい問題である。

２－④　教育・学習

◎学校・図書館

学校には、生身の教師がいて、生身の学生・生徒がいる。基本的に、授業という情報伝達は、直接対面による会話を原則として行なわれる。具体的な社会が営まれ、校則の遵守が義務付けられ、放課後に掃除をする際には、イメージではなく、現実に教室が掃き清められていなくてはならない。

図書館には、電子媒体ではなく、紙に印刷された書物が置かれている。調べものをする時には、実際に図書館に足を運び、書物の背表紙を見ながら手に取ってページをめくり、必要箇所を探し出す必要がある。

インターネットが発達し、優れたＩＴ教材の開発が進んできた現在、知識を頭に詰め込むというだけであれば、パソコンの端末に噛り付いていればよいのかもしれない。しかし、コミュニケーション教育という観点から見ると、学校は、社会人として必要な基本を身に付けていく重要な役割を負う教育機関になっている。

◎検索エンジン・データベース

マスコミの発達とともに、学校教育が提供する情報が相対化され、かつて程の価値は認められなくなった。「先生」が言うことよりも「テレビ」が言うことの方が影響力を持つようになったのである。

また、インターネットの普及・発達とともに、子供たちは、より高度な情報を入手できるようになった。高校では、大学進学について指導する教師と、大学受験をする高校生とが、ネット上の同じソースから情報を入手しており、入手情報の質や量に差がなくなってきたという。

この傾向は、これからも大きくなるであろう。その時、「教師」と「生徒」を分かつものは、「情報に対する向き合い方」「コミュニケーション能力」の力量の差ということになるだろう。当然、教師は「ＩＴ社会」に浮遊する様々な情報の真贋・価値・有用性・危険性を見抜く力を持たなくてはならないだろうし、「ＩＴ社会」以前から営まれてきたコミュニケーションのあり方を踏まえ、的確な情報の授受ができる存在であることが求められるだろう。

３．コミュニケーションが成立する条件

２．において、「ＩＴ社会」が従来のコミュニケーションのあり方を、どのように置換させていったかを見た。そして、これらの置換がもたらした問題点を考察した。

このように置換の前後を俯瞰すると、ＩＴ社会がもたらした劇的な変革に、現実社会、特に教育の現場が、まだ上手く対応できていないことが分かる。

ＩＴ技術を駆使するがゆえに生じるコミュニケーション齟齬の問題、それをいかに解決していくのか。私自身は、非常に単純なところにそのヒントがあるように思っている。

言語によるコミュニケーションは、人類の社会にとって不可欠なものである。それはＩＴ社会以前に、長い伝統と様式を培ってきた。テクノロジーの発達によって偶々生まれた技術によって、その伝統と様式が継承されず、失われてしまうのは非合理的である。

様式は決して形骸ではない。手紙の例を考えれば分かるが、様式の中に、読み手への配慮その他、高い精神性の内実が含まれている。我々は、そのようなものを失ってはならないのではないだろうか。

コミュニケーションは、アリストテレスが指摘するように、「話者の良き人格」が前提となっていなければ、信頼に足るものにはなり得ない。まず、話者は、自らの言動によって、自分が信頼に足る人間であることを証し立てていく。そして信頼関係を築く。この行為こそ、コミュニケーションが成立する最大の前提であり、結果である。

極端に合理的な考えをする者にとっては、時候の挨拶など、メッセージの内容としてみれば、不要なノイズとして感じられるだろう。しかし、人間はいきなり用件に入る人物をどう思うだろうか？エゴの強い自己中心的な者として排除するのではないか？手紙にせよ、会話にせよ、猛暑や極寒の中、仕事に励む境遇を共有する者として、互いの身体をいたわる挨拶をした後、本題の仕事の話に入る人間の方を、人は信頼する。コミュニケーションが成立する条件とは、本来はこのようにシンプルなものであろう。

直接対面して会話することを考えれば、初対面の相手に、いきなり自分のプライベートな嗜好を明かす者はいない。しかし、電子メールの世界（メル友）ではそういう奇妙なことが起きている。そういうことの不自然さに敏感になり、まともなコミュニケーションのあり方に配慮できるようになることを、我々は後代に教育していく必要がある。

４．まとめ

新技術の発達に伴って、旧来の技術は置換され、姿を消す。分かり易い例でいえば、「竈とお釜」が「電気（ガス）炊飯器」に取って変わったことを思い浮かべてみればよい。この変化もＩＴ技術同様、劇的であった。土間にあった台所が床の上に上がり、薪による火力の調整が不要になった。それどころか、タイマー機能で寝ている間にご飯が炊け、朝は目覚めと同時に炊き立ての美味しいご飯が食べられるようになった。

では、ＩＴ技術は何を置換し、変化させたのか。これは２．で考察したとおりだが、この置換は、電気（ガス）炊飯器とは大きく性質が異なっている。コミュニケーションのあり方に変化をもたらしたのである。人と人との間にあるもの、つまり文字通り「人間」そのもののあり方に影響を及ぼしてしまった。

今まで考えられなかった非行や犯罪が、ＩＴ技術を背景に発生しているし、ネット中毒による引き篭もりやニートの発生も無視できない。

このような負の作用をいかにして解消するかは、難しいものがある。この問題は、環境問題に良く似ており、根気強い取り組みが求められるであろう。そのためには、ＩＴ社会以前を知る者は、何が置換されたのか、置換されることで何が失われたのかについて、自覚的でなければならないだろう。そして、「手紙」の作法に代表されるような、旧来のコミュニケーションが長い時間をかけて培ったマナーを、後代に伝える義務を負うであろう。

以上